





# おかたおくり

これから、わしが話すのは、柿野にあるおかたおくりという所のその名の起りじゃ。

そこは、むかしから昼間に一人で歩くのも気味が悪いほどの山道やったげな。そんな道を妻木つまぎの山寺に住んどった乾物売りの男は、毎日通って行商をしとったげな。

その日はいつになくぎようさん売れたが、おそくなつてしまつてな、薄暗い山道をびくびくしながら中ほどまで来たとき、大きな犬が口をあけとつたんじゃ。

男は、その姿が恐ろしく、じつと立ちつくしたんじゃが、なんか様子が変じゃつたので、おそるおそる近づいて行つたんじゃ。すると犬は苦しそうに口をあけてハアハアいって、何かをだそうとしているんじゃ。近づいてよく見ると、どの奥にとげがささつとつたんじゃ。

「これじゃ、かわいそうだわい。とつてやるからかみつくなよ。いいか、いいか」

男が口の中に手を入れて、とげをぬいてやると、犬は尾をふつて喜んでどこかえ消えていったんじゃ。

そんなことがあつてから、いく日かたつたころかな。いつものように荷物を背負つて帰つてくると、とげをとつてやつた犬が飛びだしてきて、はっぴのすそをひっぱるんじゃ。

「なにするんだい。はなせ、はなせ」

とふりはらおうとしたが、犬が必死になつてますますひっぱつてさ、どこかに連れて行くとするのや、犬のいう通りにひっぱられて着いた先は、山奥のほら穴でさ、犬はそこへ無理矢理むりやりに引きこもうとするのじゃ。男は訳わけのわからないまま、ほら穴に入つたげな。

犬が外へ出そうとしないのでさ、じつとして

いると、ドドドツと地の底から響ひびいて来るような、ものすごい音がしたと思う間もなく、今まで見たこともないぎようさんの犬が、通り過ぎで行つたんじゃ。おそろしい光景こうけいじゃつたげな。

「もし、おれが知らずに歩いていたら、凶暴きようぼうな山犬に襲われて、今ごろは……」

男は身の毛がよだつ思いだつたとき。男は自分を助けてくれた犬を、しっかりとだき、

「おんしは、この前の恩を忘れないで、助けてくれたんだな、ありがとう」

といったんだ。そうしたらさ、犬がはっぴのすそをくわえて外に出て、山寺の家まで送つてくれたんじゃ。

それ以後、こんな恐ろしいことは起こらなかつたげな。男は相変わらず乾物を持って、この道を通つて商いをしていたげな。それから山道にさしかかると、どこからともなくその犬がやつて来てさ、男の後について、山寺の家まで送つてくれるようになったんじゃ。

こうしてな、男を家まで送るために、犬の現れる所をいつのまにかおかたおくりと呼ぶようになったといふことじゃ。

(再話…小林万理子)

(絵…安藤 實)

【お方送り】  
今も、鶴里町柿野字大むかいから瀬戸の大岩へ行く途中に『お方送り』と呼ばれる所があるそうです。  
謂れでは、お犬さまに山寺の家まで送ってくれたお礼として、皿に塩を入れてやると、きれいに舐めて帰って行ったとのことです。



このお話は、(社)土岐青年会議所発刊の『土岐の昔ばなし』から転載させていただきました。